

# 事例から乳幼児期の言葉の発達を促す要因を探る

## A Case Study Analysis on Factors Influencing Language Development of Infants and Young Children

次世代教育学部こども発達学科

大野 鈴子

OHNO, Reiko

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

**キーワード**：言葉，発達の過程，要因，乳幼児理解，言葉の獲得

**要旨**：乳幼児期の子どもの言葉の発達をみると，個人差やその時の子どもの状況によって表れ方は多様である。しかし，どの子どももおおよそ同じような育ちの過程をたどる。保育者は言葉の発達の過程を把握し，一人一人の子どもを理解し，その時どきの子どもの思いに応じ，育ちを促す援助に努めなければならない。その際には，促す背景となっている要因に基づいた援助が大切である。そこで，5つの実践事例を分析し，言葉の発達を促す背景となっている要因を探り，より適切な援助について明らかにした。

**Keywords**：language, process of child development, factor,

comprehension of infants and young children, language acquisition

### 1 はじめに

子どもの言葉の発達をみると，話し始めに個人差があり心配したり，言葉を覚えさせるための指導になったりして，年齢に応じた指導や何を大切に指導しなければならないかに，保育者は戸惑いを感じている。

言葉を促す背景となっている要因を年齢別の実践例から探り，乳幼児理解に基づいた発達の過程を踏まえ，より適切な指導の在り方を明確にし，協力園に提示していきたい。

### 2 幼稚園教育要領・保育所保育指針による指導内容

幼稚園教育要領・保育所保育指針の領域「言葉」では，3つのねらいが設定され，それを実現するために幼稚園では10項目，保育所では12項目の内容，そのための取扱いもあげられている。

3つのねらいをみると，「自分の気持ち」「自分の経験したことや考えたこと」「生活に必要な言葉がわかる」など，子ども自身が『伝えたいと思う心情』を大切にし，生活の中で伝え合う言葉を大事にしていることがわかる。

保育所の内容には，乳児と保育者との応答的な関わりや話しかけ，遊びを通しての言葉のやり取りがあげられ，保育者の援助が重要になっている。

内容の取扱い（1）では，身近な人との関係の中で思いを伝え，相手が応答することを重視し，『伝わる喜び』『心を通わせる』という心情・意欲・態度を育てることが大切だと捉えている。また，『言葉を交わす喜び』からより豊かに言葉を獲得していくと考えている。

内容の取扱い（2）では話を興味をもって聞き理解するようになって，『伝え合う楽しさ』を感じ，言葉を使う『心地よさ』や『必要感』を感じるようにしていくことが重要であると捉えている。

内容の取扱い（3）では，『絵本などの世界を楽しむ』『想像する楽しさ』など，絵本や物語の内容と自分の経験を結び付けて楽しみながら，『言葉の楽しさや美しさ』など言葉の感覚を養うことが大切であると捉えている。

内容の取扱い（4）では，文字などを使いながら『伝える喜び』や『文字に対する興味や関心』を生活の中で養っていくようにすると捉えている。

### 3 言葉の発達の過程の把握と援助

子どもの言葉の発達をみると、多くの過程を経て言葉を獲得していくことがわかる。

あやされて声を出したり笑ったりする姿から、喃語や表情を通して保育者とのやり取りを喜ぶようになる。1歳6カ月ごろになると簡単な言葉を理解するようになり、次第にやり取りを楽しむようになっていく。3歳になると友達の話の聞いたり、してほしいことを言葉で伝えたりするようになる。そして、様々な言葉に興味をもったり絵本を見てイメージを広げたりするようになっていく。5歳になると、考えたことを友達に話し、伝え合うことを楽しむようになり、身近な文字に触れ、言葉への興味を広げていく。

おおまかな発達の過程でどの子どもも同じような過程を経ていくが、言葉の発達は個人差が大きいので、子どもの姿を見る時、一人一人に応じた理解が必要なおことに留意しなければならない。

参照 保育所保育指針 P123 子どもの発達過程における保育の視点（例：「言葉」）

発達の過程を見ると、子どもにかかわっている保育者の存在が大きく、援助が発達を支えている。一人一人へのまなざしや言葉かけ、思いのくみ取りなどが信頼関係を築いている。言葉を引き出す遊びの環境や雰

囲気も大切であり、絵本や歌、手遊びなどにもイメージを広げたり、友達と心を通わせ楽しさを共有したりできるような援助が必要である。また、話すこと、聞くこと、話し合うことを通して、人とかかわる力の基礎を育んでいくことが重要で、保育者はよきモデルとなり、仲立ちをしていく必要がある。

### 4 研究の方法

岡山市内の幼稚園・保育所に出かけ、保育実践を記録するとともに、保育者の個人記録から言葉にかかわる部分を抜き出してもらったものについて整理し、分析し、要因を探る。

### 5 実践事例

#### (1) 1歳児の事例

喃語から簡単な言葉の理解への発達の姿I児（男児）を追って

〈家庭背景〉 H23年3月23日生

父、母、姉（4歳児）、祖父、祖母、本児の6人家族。父親、母親は仕事があるため、祖父母が主に送迎をして、子育てに協力してくれている。今年度からの入園。

#### 〈子どもの姿と保育者の援助と指導の重点〉

月 (月齢)	子どもの姿 言葉にかかわる発達の姿 太字	保育者の援助と指導の重点 ( ) 要因
4月 (1:0)	○登園時は泣くが、抱くとすぐに落ち着き、お気に入りのガラガラ（小さいペットボトルにビーズを入れたもの）を「Iくん、ガラガラあったよ」と渡すと、振って音を鳴らして遊び始める。 ○ガラガラの音が鳴ると「あ〜あ〜！」と言って、嬉しそうに喃語を発している。「ガラガラ…音が鳴るね。楽しいね。」と声をかけ、保育者も『おもちゃのチャチャチャ』などの歌を歌いながら一緒にガラガラを振ると、嬉しそうにまたガラガラを振っている。	○登園時、泣いている時は、保育者が抱いたり、やさしく声をかけたり、1対1での関係を大切にしながらゆったりとかかわり、信頼関係を築いていけるようにする。 ○本児の喃語を受け止め、気持ちをくみ取って、簡単な言葉で表したり、一緒にガラガラを振って楽しさを共感したりすることで、自分の気持ちが受け止めてもらえたという満足感を感じられるようにする。  (受け止めてもらえた満足感)
5月 (1:1)	○警戒心が強く、初めての物は家でも食べないということで、家でする声かけと同じように「マンマ」「マンマおいしい！」と声をかけると安心し、少しずつ色々な食べ物が食べられるようになる。	○「おうちマンマ」「マンマおいしい！」と家庭で食べるのと同じような声かけをすることで、安心して食べられるようにする。  (家庭と同じ安心感)

<p>6月 (1:2)</p>	<p>○保育者のまねをして、『手をたたきましょう』の歌に合わせて、手をたたいたり、体を左右に揺らしたりして楽しんでいる。『一本橋こちょこちょ』や『大根1本抜いてきて』の曲に合わせて、体を触られ笑い声を出して喜び、ふれあい遊びを楽しんでいる。</p>	<p>○日常のふれあいを大切に、満足感がもてるようにゆったりとかかわることで、自分の思いを体や表情、声に表すことができるようにする。</p> <p>(ふれあいによる楽しさ)</p>
<p>7月 (1:3)</p>	<p>○抱いて欲しい時は、保育者に両手を伸ばして自分の思いを表現しようとする。「抱っこ？」と声をかけ、抱っこをすると保育者にもたれかかり、安心した様子を見せる。</p> <p>○午睡の時に布団に寝転がって「ママ、ママ…」「パパ、パパ…」と繰り返し言う。言えるようになった嬉しさを感じたり、繰り返すことで言葉の響きを楽しんだりしている。</p>	<p>○「抱っこ？」と本児のしぐさを言葉にして返し、「ママ？ママね。」「ママお仕事だね。」など言葉を繰り返したり、言葉を加えて返したりし、本児の喃語やしぐさに共感し、受け止め、表現する喜びを育てるようにする。</p> <p>(言えるうれしさ、言葉の響きの楽しさ)</p>
<p>8月 (1:4)</p>	<p>○保育者が服の袖や足を入れるところに手を添えて「足を入れて」「こっちだよ」「頭が出るよ」「手はこっちだよ」など簡単な言葉かけをしながら、わかりやすく伝えることで、手足を動かして着脱しようとする。</p> <p>○歌に合わせて、本児の目を見ながら「Iくん」と名前を呼ぶと、手を上げ返事をする。</p> <p>○「あ～(せんせい)」と保育者を呼ぶ。「は～い？Iくん」と返事をする、にこっと笑い嬉しそうにする。</p>	<p>○着脱の中で、袖や足を入れる部分に手を添えて、「足を入れて」「こっちだよ」「頭が出るよ」「手はこっちだよ」など、わかりやすく声をかけるようにすることで、簡単な言葉を理解して着脱できるようにする。</p> <p>○歌を歌いながら、順番に名前を呼んでいき、楽しい雰囲気の中で返事ができるようにする。</p> <p>○本児の言葉に丁寧に受け答え、返していくことで、伝わる楽しさや嬉しさを感じられるようにする。</p> <p>(伝わる楽しさやうれしさ)</p>
<p>9月 (1:5)</p>	<p>○保育者があいさつの歌を歌い始めると、食事前のあいさつでは、手を合わせて頭を下げたり、昼寝前のあいさつでは、膝に手を置き頭を下げたりして、身ぶりですようとしている。</p> <p>○おもちゃを取られそうになった時など、自分の思いを「あ～！」と言って怒りを伝えようとする。</p>	<p>○保育者が積極的にあいさつをしたり、楽しい雰囲気の中で歌に合わせてあいさつをしたりして、毎日の繰り返しの身につくようにする。</p> <p>(言葉の意味を感じ取ろうとする思い)</p>
<p>10月 (1:6)</p>	<p>○手洗いの時に保育者が手を添えていると「あー！」と言って手を引っ込めて嫌がり、自分でしようとする。</p> <p>○絵本を見ながら車やごちそうを見つけるとうれしそうに「あ～！」と言い、自分の思いを伝えようとする。保育者が「あったね」「ブーブーだね」「おいしそうごちそうだね」と声をかけると、うれしそうにまた絵本を見ている。</p>	<p>○その時の状況から本児の気持ちをくみ取り、「いやだったね」「おもちゃ、欲しかったの？」と丁寧に言葉にして返すようにする。</p> <p>(思いを伝えようとする意欲)</p> <p>○うれしそうに「あ～！」と声を上げている時には、うれしい気持ちに共感し、「あったね」「うれしいね」「たのしいね」と丁寧に言葉にして返していくようにする。</p>
<p>11月 (1:7)</p>	<p>○保育者が絵本に載っている車を指差して、「これは？」と聞くと、本児も車を指差して「ブーブー」と言う。</p> <p>○着脱の時に、保育者が本児のズボンに手を添えて「ぎゅっ！として」と声を掛けると、パンツやズボンを上げようとする。</p> <p>○「はな」と言って、鼻の部分に指差し、鼻水が出たことを知らせようになる。「鼻水が出たの？」と声をかけ、鼻水をきれいに拭くと嬉しそうに顔を、また遊び始めている。</p> <p>○「ぎゅうにゅう」と言って、コップを保育者に差し出し、牛乳のおかわりを要求する。「牛乳のおかわりがいるの？」と言って、保育者がコップを受け取り、「どうぞ」とおかわりを渡す。「ありがとうは？」と言うと、うなずく。</p>	<p>○絵本に載っているものを指差して「これは？」と聞くことで発語を促し、簡単な言葉のやりとりが楽しめるようにする。</p> <p>(簡単な言葉のやりとりの楽しさ)</p> <p>○本児がわかりやすいように手を添えながら声をかけ、簡単な言葉を理解して、身の回りのことができるようにする。</p> <p>○本児のしぐさやつぶやきを見逃さずに気付き、「鼻水が出たの？」「牛乳のおかわりいるの？」と言葉にして返し、丁寧に代弁しかかわっていくようにする。</p> <p>○「どうぞ」「ありがとう」などの言葉をかけていき、簡単な言葉のやりとりが楽しめるようにする。</p> <p>(簡単な言葉の理解)</p>

## 〈考察〉

4月、信頼関係を築くところから取り組み、抱いたり、歌を歌ったり、やさしく声を掛けたりして毎日の繰り返しの中で保育者に親しみを感じ、簡単なことは理解して、活動することができるようになってきている。

また、3月生まれということもあり、身ぶりやしぐさ、「あ～あ～」と声を出したり、うれしい時「わ～」という声で、思いを伝えようとすることが多い。そのため、喃語やしぐさに共感し、表現する喜びを育てるようにしたり、本児の思いを丁寧に言葉にして返したり、片言を繰り返したり、簡単な言葉で表すことができるようにしてきた。

このような事から、少しずつ自分の思いを喃語やしぐさ、片言で表現できるようになり、「パパ」「ママ」「ブーブー」などの単語が出てきている。最近では、鼻水が出ると「はな」と言って知らせたり、牛乳のおかわりを「ぎゅうにゅう」と言って知らせたりできるようになってきた。

これからも、本児のしぐさやつぶやきを見逃さず、丁寧に言葉にして返し、かかわっていくようにしたい。

## (2) 2歳児の事例

保育士や友達とのかかわりを通して言葉を少しずつ獲得していくA児（女児）

〈家庭背景〉 平成22年1月13日生まれ

1歳児からの継続児である。

父、母、兄（年長）、本人の4人暮らしである。

5月（2：3）

○失尿した時には、「おしっこ出る前に教えてね」と言葉で伝えやすい雰囲気を作り、繰り返し声を掛けると、自分から「おしっこ出そう」とトイレで排尿することができる。A児の「おしっこ出たよ」に「すごいね。トイレでおしっこできたね。やったー」と認めると、A児は「えへへ。ママにも言っとって」と言い、「うん、お母さんにもAちゃん、トイレでおしっこできたよって伝えておくれ」と答えると、A児は嬉しそうな表情をする。

（体で感じ言葉にして伝える感覚）

（受け止めてもらえた喜び）

8月（2：6）

○数人の友達とブロックで遊んでいる時、C児と緑のブロックの取り合いになる。A児が「叩いたらいいけん

よな」と保育士に言い、「そうだね。Cちゃんたくさん緑のブロックもってるねえ。Aちゃん、一緒に貸してって聞いてみよう」と話す。A児と保育士が「貸して～」と言うと、C児は「嫌よ。カエルになったら貸してあげる」と答える。「カエルさんになったら（時計にカエルのマークを貼って、待つ時間を自分で見ても分かるよう視覚的に表し、落ち着いて待つことができるようにしている）貸してくれるんだって。Aちゃん、友達を叩かなくてえらかったよ」と抱きしめてもらう。

（自分なりに考えてとった行動を認めてもらえた喜び）

9月（2：7）

○気の合うC児にA児が「Cちゃん、一緒にままごとしよう」と誘うと、C児は応じる。A児が「先生、ポポちゃんに洋服着させて」と要求する。「いいよ。Aちゃん、ポポちゃん好きなの？」と尋ねると、「Aちゃんな、お家にもポポちゃんあるんよ。かわいいスカートがあるん」とすると、C児も「Cちゃんもあるんよ」と言う。「ポポちゃんあるんだ。いいね。はい、どうぞ。洋服着せたよ」A児は「ありがとう。Cちゃんポポちゃんに布団かけよう」「そうしよう」。「ポポちゃん、おしっこしちゃった」とか、「ごはんつくろうね」「ケーキがいいな」などと、A児は、C児や保育士と言葉を交わしながらままごと遊びを楽しむ

（友達と一緒に言葉を交わしながら遊ぶ楽しさ）

10月（2：8）

○A児は表現遊びが好きで、「先生、ウサギさんの曲弾いて」と言う。ウサギの曲を弾くと他の保育士と一緒に、喜んでびよんびよん跳び、ウサギの真似をする。次は「ワニさん弾いて」と言う。曲を弾くと、ワニの真似をして、床をはうように動く。恐竜展に行った子どもがおり、今までやったことのない「恐竜がしたい」と保育士に伝える。恐竜をイメージして弾くと、喜んで「ガオー」と言いながら恐竜を表現する。

（したいことを体と言葉を使って表現する楽しさ）

11月（2：9）

○午睡前、パジャマの着替えをしている。A児の「Dちゃん、パジャマ新しいが！Aちゃんとハートのパジャマ一緒だね」という言葉に、2人は「一緒だね」「一緒だね」と喜ぶ。側の友達が「でも色が違うね」と言う。保育士が「AちゃんもDちゃんもハートのパジャマぬくぬくでかわいいね。いいなー」と言うと、A児が「えへへ。先生も買ったらいいが」と言う。

（「一緒だね」と仲間として認識し合い言葉のやりと



## りの楽しさ)

### 〈考察〉

4月より、本児は保育士や友達と話をすることが好きであったが、思いが通らなかつたり伝えたい気持ちが強くなつたりすると、友達をひっかくことが多かった。その都度、本児の思いを受け止めるとともに、本児の気持ちを代弁して「貸してほしかったんだって」「一緒に遊んだら楽しいよね」などと伝えたり、「痛かったよ」など友達がどう感じたか知らせたりすることにより、友達と一緒に遊べるようになってきた。少しずつ「口で言うんよな」と保育士に聞いてきたり、自分から「ポポちゃん(人形)どうぞ」と友達に玩具を貸したりする姿も見られるようになった。そのことにより、友達とやりとりをしながら一緒に遊ぶことを以前よりも楽しんでいる。記録を振り返ってみると、言葉で伝えることが難しいから手が出ていたことがよく分かったので、言葉の発達の過程を知ることが乳児・幼児理解につながると感じた。

今後は、遊びの中で、友達とやりとりをして受け入れてもらったり受け入れたりして遊ぶ楽しさを感じられるようにしていきたい。

### (3) 3歳児の事例

ごっこ遊びで役になりきっていろいろな言葉を使って遊ぶ  
「病院ごっこ」 (7月)

雨の日、A児が聴診器を持ってきて、病院ごっこが始まった。ぬいぐるみを抱っこした子どもたちが病院ごっこに参加する。教師は場所を確保したり、必要な遊具や材料を準備したりする。

医者役のA児「次の人どうぞ」「○○ ○○さん(名前を全部言う)」「どうしましたか」に患者の保護者役のB児「この子、足が痛いんです」C児「ゲロしました」D児「熱です」と言う。A児は、「薬をどうぞ」と紙を渡し、「熱を測ります」とサインペンを渡している。A児はいきいきと役になりきり、患者の保護者役のB児・C児・D児たちは心配そうな表情を浮かべる。E児が、「ぼくもお医者さんになる」と、A児の隣にイスを持ってきたが、なりきって楽しんでいるA児は受け入れている。教師が机やイスを並べて待合室を作ると、静かに順番を待っている。

(役になりきって遊ぶ楽しさ)

(自分なりに獲得した言葉を使う楽しさ)

### 〈考察〉

ごっこ遊びの世界に入り込んでいたことで、会話を楽しむ姿が見られたのだと感じる。役になりきって遊び、友達とのかかわりが増えたと思う。

また、病院ごっこをきっかけに、一方的な話しかけではなく友達との会話のやり取りを楽しむようになった。何度も繰り返し病院に来て話すことで、会話がスムーズになったり、他の友達の言葉を吸収して取り入れて使ったりする姿が見られた。

### (4) 4歳児の事例

絵本を通して、物語や言葉の楽しさを感じ自分のものにしていく

A児 ~保護者との連携を通して~

2年保育4歳児

幼稚園の4歳児は家庭での絵本経験の差から、4月当初は絵本の読み語りに対しての幼児の反応、楽しみ方には大きく差がある。そして、絵本による言葉の獲得やイメージの広がり、言葉の発達に大きく影響すると考える。

そこで、幼稚園での絵本の読み語り、親子絵本、絵本の貸し出しを通して、絵本の読み語りを喜び、絵本を好きになっていけるように考えた。

### 《A児の実態》

入園当初、初めての園生活に対し不安を感じ母子分離がしにくかったが、少しずつ園に慣れ、気の合う友達もできだすと、安定して園生活を楽しめるようになった。

絵本に対しては、園での読み語りに興味をもって参加している。じっくり見ることができているが反応はあまり見られない。

10月初旬

「この本おもしろえよ」

『ブタヤマさんたらブタヤマさん』

選んだ遊びの時間、クラスの書架にある絵本を開いて見ている。「今日、これ読んで、この本おもしろえよ」と言う。

A児は内容を自分で読んで知っているの、ワクワクしたような表情をしている。「ブタヤマさんたらブタヤマさん・・・」の繰り返しの言葉を教師と一緒に小さな声で呟いている。ページごとに次第に周りの幼児の反応が大きくなる様子を見て、A児の声も大きくなっていった。読み終わったあと「Aちゃんおもしろ

れえのみつけたな」と言われ、満足そうな表情を浮かべる。

(繰り返しの言葉の楽しさや展開の楽しさ)

11月下旬

「言葉って楽しい」

『るるるる』『かかかか』『てててて』

クラスの書架に置いてあった同じシリーズの本を見つけ、開いて見ては友達と一緒に楽しんでいる。その後、「また読んで」と持ってきたので、読み語った。

始まりから、教師が読み進むのに合わせて、友達と一緒に「る」「るる」などと言葉を言い楽しんだ。読み語った後、書架に戻しておくと、A児や他の幼児も再び手に取り一緒に楽しんでいる。絵本の貸し出しでも、借りて家庭でも楽しんでいた。

(字への関心と一文字から広がるイメージの楽しさ)

A児の保護者の絵本のコメントより

11月8日

『ぞうのみずあそび』『なぞなぞな～に はるのまき』  
(A児が借りた絵本)

【いつも本を借りて帰った時「何でこの本にしたの？」と聞いています。答えは「ずっと前に先生が読んで忘れちゃったから」でした。私はつい、絵で本を決めてしまいます。Aは色々なジャンルで色々な絵の本を選んでくるので毎回、「今日はどんな本を借りてきたのかな～♪」と楽しみにかばんを開けるんですよ。】

(親子で読み語るひと時の楽しさ)

〈考察〉

・毎日の読み語りや絵本の貸し出しを通して、自ら絵本を手にとって楽しむようになったり、それをクラスの友達に対して紹介したいと感じるようになったりした姿から、A児の成長を感じ取ることができた。絵本ノートのコメントからA児の保護者自身も、絵本の貸し出しを楽しみにしたり、親子絵本への参加を喜んだり積極的にかかわっている姿が見られ、そのこともA児の変容に影響していると思った。絵本を好きになるには、園での読み語りだけでなく家庭での絵本の読み語り也不可欠であることを実感した。

(5) 5歳児の事例

トラブルから問題点を見つけ、話し合う。

5月18日(選んだ遊び)

登園するとすぐに、子ども達は「缶蹴りしよう！」と言いながら園庭に集まる。A児は缶を蹴られないようにと、ずっと缶の側にくっつくようにして立っている。A児が、遠くに見つけたB児(男児)に向かって「Bくん見つけた」と言ってすぐに缶を踏む。B児は、自分がアウトになったことが悔しくて、A児の側まで走ってくると「そんなに近くですぐに踏むのはいけんで」とA児にきつく言い押し合いになる。集まって来た数人の子ども達も「今はセーフで」「Aくん、いけんよ」とA児を責める。一方で、鬼役の子ども達は「見つけて缶を踏んだらアウトよ」「Bくんアウトアウト」とA児の行動を認める。A児は黙ってその場にしゃがみ込んでしまう。

教師は、みんなでルールについて考えるきっかけにしたいと考え「困ったね、どうしてBくんは近くで踏むとだめなの？」と尋ねる。B児は「だって、近くで踏んだらすぐにアウトになるもん」と言う。聞いていた子どもは「じゃあ、見つからないようにして蹴ればいいが」と言うが、B児は「違うよ！」と再び怒って受け入れようとはしない。そこで教師は「蹴るときには、すぐにアウトにならないように、こっそり蹴りに行くことが大事なんだね。」と、先程思いを言った子どもの言葉の意味が伝わるように知らせる。さらに「見つからずに蹴るのが缶蹴りの面白いところなんだよ」と缶蹴りの面白さや特徴をB児に伝える。A児は黙ってしゃがんだままではあるが、そのやり取りに聞き入っている様子である。A児も聞きながら問題点を振り返ることができるように、「ずっと缶にくっついてはいることはどうする?」と全体に投げ掛ける。すると、みんなは口々に「だめ!」「それじゃあ面白くない」等と言う。その声を聞きA児は顔を上げる。「じゃあくっつきすぎないようにするにはどうする?」とさらに尋ねると、しばらく沈黙の後、1人の子どもが「缶の周りに線を描いたら?」と言う。聞いていた別の子どもも「分かった。線を描いてその中に入らないようにしたら?」と言う。教師は「そうかあ。それなら近付きすぎないでいいね」と考えを認め、A児に「Aくん、みんなが良い考えを出してくれたよ。もう一度これでやってみようよ」と声を掛ける。A児もB児も気を取り直して、再び遊び始める。

その後、A児は缶の周りに引いた線を意識して中に入らないようにし、B児は隠れた場所からのぞきながら缶を蹴るタイミングを意識している様子が見られる。

(遊びをみんなで一緒に力いっぱい楽しみたいとい

う思い)

(自分の思いを伝えながらも友達の話聞き、考えようとする態度)

#### 〈考察〉

○鬼役の子どもは「見つけてアウトにしたい」、逃げる役の子どもは「捕まりたくない」「缶を蹴って助けてみたい」という気持ちでいっぱいである。互いに必死になっていると、その思いがぶつかってトラブルになったり遊びが続かなくなったりすることはよくある。A児は、「友達を見つけたら缶を踏んでアウトにする」というルールは守っている。しかし、缶の側でじっとしておくことについては、どうするか決まっていなためB児にとっては納得がいかない。この場面では、B児に「鬼に見つからずに缶を蹴る」というルールや缶蹴りの面白さを知らせるとともに、A児が缶に近付きすぎているという問題点を解決できるようにみんなで考える場をもった。そうすることで、「缶の周りに線を描く」という考えが生まれ、A児、B児だけでなく、缶蹴りをしている子ども全員が新しいルールを共有して遊ぶ姿につながった。

## 6 まとめ

○実践事例の年齢別の姿は、一部かもしれないが、大まかな発達の過程が表れている。1歳児では喃語から簡単な言葉の理解が出来るようになるまでの保育者のきめ細かな援助による発達の姿がみられる。発達を促している要因は、保育者に受け止めてもらえた満足感や安心感、思いが伝わる嬉しさや楽しさだと考える。そうした思いは、簡単な言葉を理解しようとする意欲につながっている。このように、要因は保育者の援助の在り方を示していると考ええる。

○2歳児では、保育者に依存しながら、友達とのかかわりの中で自分の思いを伝えようとするようになる。自分なりの行動を認めてもらった喜びや友達との言葉のやりとりの楽しさが促す要因になると遊びに必要な言葉を使って役になりきって遊ぶようになる。遊びを十分に楽しむことや言葉を使う楽しさ、友達と思いを伝え合う喜びなどが要因になると考える。

○4歳児になると、言葉の楽しさや面白さを感じるようになり、絵本や話などに関心を示すようになる。言葉の楽しさや絵本から広がるイメージの楽しさ、分かり合える友達の存在、保護者との連携などが促す要因と考える。

○5歳児になると、自分の意見を言いながら、友達の話聞き、話し合うことができるようになる。話し合い遊びを楽しくしようとする思いや課題に添って話し合おうとする態度などが要因になると考える。要因を背景に、援助を広く受け止め、見通しをもった援助に努めることが言葉の発達を促すと考える。

#### 参考文献

- ・秋田喜代美・野口隆子編著（2009）「保育内容 言葉」 光生館
- ・阿部明子・小川清実・戸田雅美編著（1997）「保育内容 言葉の探究」 相川書房
- ・厚生労働省（2008）保育所保育指針解説書 フレーベル館
- ・柴崎正行・戸田雅美・秋田喜代美編（2010）ミネルヴァ書房
- ・戸田雅美編著（2009）「演習 保育内容 言葉」 建帛社
- ・文部科学省（2008）幼稚園教育要領解説 フレーベル館